【2022 年度優秀卒業論文】

「動物は世界貧乏的である」というテーゼに正当性はあるのか
――『形而上学の根本諸概念　世界―有限性―孤独』第四五～六三節におけるハイデガーの動物論の検討

島雄　万由子

はじめに

ハイデガーは『存在と時間』第二篇第一章において現存在の死と「終わり」について論じている。

> 死亡するという意味で現存在が世界外に去って他界することは、たんに生命あるだけのものが世界外に去ることとは区別されなければならないということ、このことである。生き物が終わることをわれわれは、術語的に、終焉すると表現する（ハイデガー 2003, p. 265）。

この「たんに生命あるだけのもの」（同）とは何を指しているのか。直観に従って言えば、植物、そして現存在以外の動物であろう。ハイデガーは、少なくとも死の考察において、現存在を他の生命とは別のものとして認識している。

そのあらわれともいえるのが、第四十八節における現存在と果実の比較である。果実は未熟の状態から成熟を迎え、「成熟とともに果実はおのれを完成する」（ハイデガー 2003, p. 274）。しかし現存在の終わりは異なる。「たいてい現存在は、未完成のうちに終わるか、さもなければ、崩壊したり憔悴しきったりして終わる」（同）。未完成という言葉からして現存在はおよそ何らかの完成を迎えるのであろうが、それは成熟と関係なく、また終わりも同様である。

ハイデガーはこのように現存在と植物の比較を行ったが、一方で動物と現存在に関して植物と同等の比較検討は行われていない。生物学的な観点からみると現存在、すなわち人と動物との関連は切っても切り離せず、「たんに生命あるだけのもの」（ハイデガー 2003, p. 265）は植物のことのみを指すと明言されていない以上、現存在と動物の比較検討の記述がないことは不自然だと言える。

ハイデガーは動物をどのような存在とみなしていたのか。それを検討するにあたり、『形而上学の根本諸概念　世界―有限性―孤独』（以降『形而上学の根本諸概念』と省略記載）を参照する。この本は 1938 年にハイデッガー全集の第 29／30 巻として刊行された講義録で

あり、ハイデガーの書籍の中でも珍しく動物について明確に言及されたことに加え、その議論の特異さから注目を集めたものである[1]。ハイデガーは第四四節で以下のように述べている。

（1）石は無世界的である。
（2）動物は世界貧乏的である。
（3）人間は世界形成的である（ハイデガー 1998, p. 302）。

この 3 つのテーゼは、『形而上学の根本諸概念』の「では一体哲学とは何であるというのか？」（ハイデガー 1998, p. 7）といった、哲学、そして形而上学という概念ついての探求から生じたものである。この問いはさらに「世界、有限性、単独化、それは何であるか？」（ハイデガー 1998, p. 14）という形に発展する。この問いについてハイデガーは、現存在の持つ「根本気分」である「退屈」という状態を手掛かりに検討を進めていく。しかしこの「退屈」を通した検討は途中で挫折することになる。ハイデガーは「退屈」を３つに分類し性格づけたのだが、その中の１つである「深い退屈」について、「当の深い退屈という気分の生起が全く保証されていない以上、（中略）一般的な手順としてはもはや維持することができない」（串田 2017, p. 88）という障害に行き着いたのである。

ハイデガーは改めて最初の問いに立ち返り、世界、有限性、単独化の中の世界に関する検討から再度出発する。

> われわれは、世界とは何であるか？という第一の問いの特徴づけから始めた。この問いを展開するには三つの違った道があることをわれわれは指摘した。(1) 世界概念の歴史の史学的考察、(2) われわれの日常的な世界了解からする世界概念の展開。われわれは第三の道として一種の比較考察を選ぶ（ハイデガー 1998, p. 302）。

この第三の道である比較考察の際に、本章冒頭の 3 つのテーゼが提示されたのである。議論の詳細は紙幅の都合上大幅に割愛したが、ここで示したいことは、本題である 3 つのテーゼは動物に関する直接的な議論から生じたのではなく、「世界とは何か」という問いの考察手段として示されたこと、そしてその考察は石・動物・人間を比較するという手段をとることの 2 点である。

このテーゼの中の「動物は世界貧乏的である」（同）について、おそらく多くの人が動物は貧しい、劣っている、石・動物・人間の順である種の格付けのような定義がなされている、といったような解釈をするだろう。しかしハイデガーはこのテーゼについて、優劣をつける意図は一切ないとして以下のように述べている。

[1] 串田 2017, p. vii.

> 貧乏性ということがそれ自身で必然的に、豊富ということに対立して程度の低いものであるかどうかは、直ちに疑わしくなる。（中略）世界貧乏性と世界形成という性格づけによる動物と人間との間のこの比較は、決して完全性と不完全性とに関する査定、評価を許すものではない（ハイデガー 1998, p. 315）。

しかしこの優劣の意をもたない貧乏的という表現は本当に成立するのだろうか。比較という前提がある状態で貧乏性という言葉を用いることは、優劣をつけることを想起させかねないものであり、真に優劣付けの意図がなかった場合、そのような紛らわしい表現を避け、他の表現を用いなかったことへの疑問が生じる。

> この貧しさは位階秩序に捕らわれてはいないと、それは単に「より少ない」ことではないということを彼が強調しようとするときです――これは支持するのが非常に難しいことです（デリダ 2014, p. 290）。

上記のように貧乏的の持つニュアンスやその他ハイデガーの動物論の根幹を成す「として構造」に注目しハイデガーのテーゼを批判している人物がデリダである。デリダは多くの著書でハイデガーの論に対する批判を行っているが、本論文ではその中でも、1997 年にフランスで行われた研究集会『自伝的動物』におけるデリダの講演録である『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』の記述を取り上げ、検討する。

私は本論文において、上記の 3 つのテーゼから読み取れるハイデガーの動物論に対して、デリダの「として構造」への批判を基に人間と動物を明確に区分けすることの不適当さを指摘し、それを理由に、動物を世界貧乏的とするテーゼに正当性がないことを主張する。

本論文は以下の順序で記述する。まず『形而上学の根本諸概念』第四五～五十節の内容を検討し、石・動物・人間のテーゼは接近通路可能性、接近様式の違いによってその差が生じていることを確認し、そして移し置きを用いた分析から、動物は人間の持っている何らかのものを欠如しているゆえに「原則的に世界を欠如している」（ハイデガー 1998, p. 339）ことを明らかにする（1）。次に『形而上学の根本諸概念』第五一～六三節の記述を検討し、動物の行動は抑止解除の輪にとらわれており、その輪の内で開かれている、という独自の開性を明らかにする。そして動物はその開性によって世界貧乏的である、と言えることを明らかにする（2）。続いて『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』から、「として構造」は人間の独自のものである保証がないことを明らかにし、「として構造」の有無を根拠とした人間と動物の明確な区別が前提にあるハイデガーのテーゼに正当性がないことを主張する（3）。

1．ハイデガーの動物論 I ――「として構造」と「移し置き」

本章では『形而上学の根本諸概念』第四五～五十節の内容である、貧乏的という言葉の解

釈と３つのテーゼの分析を行う。

まず、はじめにでも触れた優劣づけのない「貧乏的」という言葉についてハイデガーの記述から検討し（1-1)、次にそれを踏まえたうえで石・動物・人の無世界的・世界貧乏的・世界形成的というテーゼについて、動物との差異を中心に分析する（1-2)。そしてその差異についてより詳細に検討する手段として提示された移し置きについて、人間－動物間における移し置きを主題としてその可能性や特徴について検討する（1-3)。

1-1　貧乏的とはどういうことか

本節では貧乏的の意味について検討する。はじめにで引用したように、ハイデガーはここでいう貧乏的について、劣等や不完全といった意味を含んでいないとし、「貧乏的で有るとは、単に、何も持たない、少ししか持たない、他の者に比べてより少なくしか持たない、ということではなく、貧乏的で有るとは欠如している（Entbehren）こと」（ハイデガー 1998, p. 316）だと述べる。また、本来の貧乏とは、人間が欠如に向き合うという「人間が貧乏的で有る有り方に関係する意味」（ハイデガー 1998, p. 317）であり、私たちが平時に使う貧乏は「拡張された磨滅した意味」（同）としている。

しかしここに世界という言葉を添え、世界貧乏的とした場合の意味については動物性自体の検討が必要である。なぜなら欠如という意味のまま貧しさテーゼを読み解くと、「「動物は世界を欠如している」、「動物は世界を持たない」」（ハイデガー 1998, p. 318）となり、「石は無世界的である」というテーゼとの区別がつかなくなってしまうからである。

1-2　3 つのテーゼの差異の検討

続いて、1-1 で生じた無世界的と世界貧乏的の差異を明らかにする。両者の差異を論じるにあたって、ハイデガーは「世界」のさしあたっての定義を以下のように記している。

> 世界とは――とりあえずここで言っておくとすれば――そのつど接近通路可能な有るもの、付き合い可能な有るもの、のことであり、それは接近通路可能であり、それとの或る付き合いが可能であり、また、有るものの有の様式にとってはそれとの付き合いが必然的であるような、そのようなものである（ハイデガー 1998, p. 319)。

この定義についてより詳細な説明はない。以降の議論内容に基づいてより平易に言い換えると、接近通路とは知覚や認識といったはたらきと関連したものである。そして世界とは対象にとって知覚や認知が可能であり、かつそれが可能であることが対象の在り方において必然的なものである。この定義を踏まえて、無世界的と世界貧乏的の違いについて検討する。

ハイデガーは石とそれの持つ無世界的という性格について以下のように述べている。

> 石は（中略）　ほかの物と混じって、ほかの物の間に、あることにはなるが、（中略）そ

> のほかの物は石にとっては本質的に接近通路可能でない、という仕方においてである。石は、それの石で有ることにおいて、それが混じって一緒にあることになっている他の物、へは全くいかなる通路ももたず、この他の物をこの他の物として手に入れたり、所有したりすることはないから、だからまた石は、決して、欠如するということをもなしえないのである（ハイデガー 1998, pp. 319-20）。

石はほかの物と同時に存在するが、そのときに石は自分がどこにどのような状態でいるかを認識することはない。地面に、あるいは草の上に置かれていると知ることもなければ、他の生物が上に乗っていてもそれを感じることはない。このような石の状態は「接近通路可能ではない」（同）と言え、先の世界の定義を満たしていない、つまり無世界的である。

次に、世界貧乏的についての記述を検討する。ハイデガーは「岩板の上で日向ぼっこをしているトカゲ」という例を挙げて説明している。トカゲはただ岩板の上にいるのではなく、岩板を探し求めている、と、生き物の習性ともいえる行動について言及し、それが石との違いであるとした（同）。また自身の生息に適さない環境に置かれた場合も、安全な場を探して「直ちにそこから逃げよう、あるいはもとへ戻ろうとする傾向が現れ始める」（ハイデガー 1998, p. 321）と述べ、ハイデガーはこのような動物の接近様式を以下のようにまとめている。

> 動物にとっては、多様なものが接近通路可能であり、しかもそれは決して手当たり次第でもなく、勝手な限界内においてでもない。（中略）動物は環境世界をもつ、動物は環境世界内で動く（ハイデガー 1998, pp. 321-2）。

加えてハイデガーは動物の接近様式について、「トカゲにとって太陽は太陽として接近通路可能であるかどうか、トカゲにとって岩板は岩板として経験可能であるかどうか、これは疑わしい」（ハイデガー 1998, p. 320）と、人間と比較して考察する。太陽や岩板は人間と同様にトカゲにも与えられているが、あくまで人間の知覚において太陽、岩板であり、トカゲにおいては接近様式の差異により人間と同じ認識は持っていないということである。この人間の接近様式は「として構造」と呼ばれ、「他の存在者を、そのような存在者として（中略）)打ち立て、そこに関わってゆく構造」（宮崎 2020, p. 210）である。ハイデガーは人間と動物の接近様式の違いについて「甲虫と草の茎」という例を用いて以下のように説明している。

> 一匹の甲虫が草の茎を這い上がって行く。この草の茎は甲虫にとっては、草の茎ではなく、いずれ農夫が牛にやる干し草の束の中の一本になるはずのもの、なのではない。（中略）この草の茎は甲虫道であり、この道を通って甲虫は何か食らえるものをではなく、甲虫餌を求めているのである（ハイデガー 1998, p. 321）。

以上から、接近通路が可能か不可能かという点を根拠に、石の持つ無世界性と動物の世界貧困性は異なること、また動物と人間の世界への接近様式も異なることが明らかになった。

しかしここで新たな問題が生じる。動物に接近通路可能性を認めることは、動物に世界があると認めることであり、貧しさテーゼが示す欠如と矛盾する、という問題だ。より具体的に言うなら、動物は世界を欠如しているのではなく、世界を「人間とは違ったふうに、そして、人間よりも狭い限界内で、接近通路可能なものとしてもっている」（ハイデガー 1998, p. 322）のではないか、という疑問である。この疑問を解消するために、ハイデガーは新たに「動物は何へと関係するのか、そして、動物は、自分が餌として捜し、獲物としてかり立て、敵として追い払うものへの関係において、いかにあるのか？」（ハイデガー 1998, p. 323）と問いを立てる。この問いはつまり、「自分のものとは異なる接近様式に対する接近可能性」（串田 2017, p. 103）について考えるということである。

1-3　移し置き

1-2 で立てた問いを検討するにあたり、ハイデガーは「移し置く」という方法をとる。本節では移し置くとはどういう行為なのか検討する。

(1)　「移し置き」と「同行する」

> この有るものへと自分を移し置くとは、この有るものが何でありいかにあるかのその何といかにとに同行する（mitgehen）ことをいうのであり――このように同行しながらわれわれはわれわれがそのような仕方でそれと共に同行しているその有るものに関して、それがどうなっているのかを直接的に経験し、それ自身の有り具合について事情説明をし、もしかすると、この同行によって、他の有るもの自身よりもより鋭くより本質的にこの他の有るものを見抜くことすらできるかもしれないようにすることをいうのである（ハイデガー 1998, p. 327）。

ここでハイデガーは「同行する」という言葉で移し置きの性格を示している。しかしこの同行することについて、どのようなものなのかは直接的に説明されていない。ただ、ハイデガーは、感情移入や対象の代理といった行動とは異なることだと繰り返し述べている[2]。また、「同行したい、また同行すべきだ、と思っている者が、事前に自分自身を放棄してしまっては、同行ということはありえない」（ハイデガー 1998, p. 328）という記述から、移し置きによって同行される対象の在り方だけでなく、移し置きを行う、同行する側の在り方も歪めてはならないと考えていることがわかる。以上のことをまとめると、同行するという表現には、混同されやすい様式との差別化、そして移し置きを行うものと移し置かれる対象の、両方の

[2] ハイデガー 1998, p. 327，p. 328，p. 334 など。

在り方を損なわずに行うという意味が込められたものであると考えられる。

(2)　人間と動物間の移し置きの可能性

ハイデガーは移し置きについて明らかにした後、人間と動物、人間と石、人間と人間の３つの条件において移し置きが実現可能かの検討に入る。

> われわれは動物へと自分を移し置くことができるか、という問いにおいて、（中略）動物の世界内での動物の接近通路と交渉とにわれわれが共に同行することは可能であって、べつに不条理なわけでもなんでもない、ということを疑問の余地なきものとして前提している。動物そのものが、自分を移し置くことのできるような圏域をいわば持ち歩いている、ということには全然疑問の余地はない。（中略）疑問なのは、（中略）自分を移し置くこと、を実現するための事実上の必要措置と事実上の限界とである（ハイデガー 1998, p. 329）。

上記のようにハイデガーは人間と動物間の移し置きについて、検討するまでもなく可能である、としている。これについて串田は「差し当たって日常的な直感という以上の根拠は示されていない」（串田 2017, p. 105）と述べつつも、人間側の同行可能性の根拠を「ある」と「いる」という動詞の日常的な使い分けの分析に求める試みを行った。

串田はまず「ある」について、「自分自身では世界を持たない物が世界の内に存在している仕方を言う」（串田 2017, p. 105）としている。「石がいる」とは言わず「石がある」と言う方が適切であることから、この見解はハイデガーの主張における無世界性と矛盾しないものである。

次に「いる」について、「ある」よりも「いる」を用いる方が適切な例としてペンギンや蝶、大腸菌といった生物を挙げ、「或る存在者が世界における自分の位置を何らかの仕方で感受しつつそのつどそれに応じた存在の仕方をしているとき」（同）に用いるものであり、その世界に応じて変化するという在り方が、移し置きが可能な理由であると述べている。上記の「いる」の定義について、世界は接近通路可能なものとして扱われており、人間、動物の持つ接近通路可能性も示されていることから、ハイデガーの主張に基づいた見解だと言える。

串田によると、この「いる」の用法についてはまだ分析の余地がある。現段階では「いる」は対生物限定の動詞かのように思えるが、「風が吹いている」といった補助動詞的用法も存在する。「いる」を適用できるかは現在という時間性と対象の運動性に根差しており、結果的に「生きている」という生物の状況におおむね一致しているのである。そして補助動詞としての「いる」が用いられた対象は必ずしも移し置きができるわけではない。また「第三師団はイラクにいる」といった物質や機械、組織に対して用いられる「いる」についても今後の課題として示されている（串田 2017, p. 106）。

以上より、「いる」を使うことができる対象が必ずしも移し置きが可能だと言えるわけではないものの、人間と動物間の移し置きが可能であるとする根拠を「ある」と「いる」の用法に求めるこの試みには妥当性があると考える。

(3) 人間と動物間の移し置きの分析

ハイデガーは移し置きの可能性に関する議論を経て、動物の世界貧乏性に対する直接的な答えは何も得られなかった一方で、人間と動物間の移し置きの自明性とその態度から得られたものがあるとして（ハイデガー 1998, p. 337）、家畜と人間の関係から考察している。

> 家畜は人間と共に「生きている」のである。ただし、生きるということが、動物の仕方において有ることをいうのなら、われわれ人間は家畜と共に生きているのではない。にもかかわらず、われわれ人間は家畜と共に有る。しかしまたこの、共に有る、は共に実存するではない。（中略）動物たちとのこの、共に有る、は、人間が動物を人間の世界の中で動かせておく、という形をとっている。（中略）犬は人間と共に餌をくらっている（fressen）――いや、人間は餌をくらうのではない。犬が人間と共に食べ物を食べている（essen）――いや、犬は食べ物を食べるのではない。とはいえ、人間と共に、ではある！一種の同行、一種の移し置かれ、ではある――が、しかし、そうとも言いきれない（ハイデガー 1998, p. 338）。

この例において一種の移し置かれが成立している点から、動物は人間の移し置きを許容する圏域を持っていることが明らかになった。しかし移し置きの圏域を持っていても、人間と動物間において、人間と人間間で行われる根源的な移し置きは成立しないとハイデガーは主張する（ハイデガー 1998, pp. 338-9）。

> 人間が或る他の人間に対する場合のような意味での自分移し置きを可能ならしめるもの、そういうものを動物はもたない。動物は或るものをもつ、そしてその或るものをもたない、すなわち、動物はその或るものを欠如している。われわれはこのことを、動物は世界貧乏的であり、動物は原則的に世界を欠如している、という言い方で表現する（ハイデガー 1998, p. 339）。

以上の家畜と人間の考察から、人間が持っている「或るもの」（同）を動物が持っていないという状態のことを、世界貧乏的と表現していたことがわかった。では「或るもの」（同）とは何か。動物が「原則的に世界を欠如している」（同）なら、動物は何を持っているのか。ハイデガーは、このまま欠如という視点から探究を続けるためには、「世界とは何であるか」（同）を明らかにすることが必要になると述べたうえで、その方法はとらず、異なる視点から世界貧乏性の考察を続けるとした。

2. ハイデガーの動物論Ⅱ――動物の「振舞い」構造の分析

本章では『形而上学の根本諸概念』第五一～六三節の内容である動物の本性の分析について記述する。ハイデガーは本論文における 1 章の内容から引き続いて、世界貧乏性について考察する。その方法として「動物性そのものを明らかにすることから、世界貧乏性の本質へと接近することを試みる」（ハイデガー 1998, p. 340）とし、当時の動物学へと議論の舞台を移していく。

まずハイデガーが動物の行動に見いだした特異性、「振舞い」に関する分析を行う（2-1）。最後にここまでの議論を総括し、「動物は世界貧乏的である」（ハイデガー 1998, p. 302）というテーゼの意味を明らかにする（2-2）。

2-1 動物の「振舞い」行動

(1) 動物の行動分析への前置き

ハイデガーは動物本性の検討に先立って、有機体というより大きな枠組みについて、当時の生物学において有力だった機械論、生気論等との比較考察を行う。この一連の議論に対する詳細な検討は紙幅の都合上割愛するが、以降の議論と関わりがある記述である。そのため、本項では有機体に関する記述を中心に概説する。

ハイデガーは、有機体の持つ諸器官の性格を、道具との比較考察によって明らかにする。まず両者に共通する可能性の提供という点に注目し、ペン軸と目という具体例を通して検討する。書くという可能性は与えられるがそれ単独で書くことはできないペン軸と、単独でものを見ることが出来る目の違いから、器官は何かが「出来る態勢」（串田 2017, p. 24）、有能性を持つことがわかった[3]。

次に道具と器官の機能するときの違いに注目する。道具は作られるときにその使い方や手順などが定められていて、それに従って機能する。器官については、アメーバの例を通して考える。アメーバは餌を捉える仮足器官がそのまま消化、吸収、排泄という機能を順次果たしていくように変化する。ここから、器官はその時の衝動の下で、その衝動に対して何かが出来る、有能であるように自分を衝き動かしていくことがわかる。また衝動によって、有能性が変化する、つまり「何かが出来る」の「何か」が変化するという点から、衝動と有能性の関係についてハイデガーは奉仕的であると述べる。また有能で有るように独自に変化する有能性について、衝動の下で、その衝動の目的に合うように自身を衝き動かしながらも自分を自分として留め置く、つまり有能性で在り続ける、という点から自分固有主催性という根本性格を見いだす[4]。以上の議論から、有能性は衝動的で奉仕的、自分を自分固有として留める性格を持つ。

最後にハイデガーは有機体の特徴について、様々な器官を作りだす様々な有能性の中に

[3] ハイデガー 1998, pp. 349-55.
[4] ハイデガー 1998, pp. 356-71.

様々に自分を衝き動かす、自分を分岐させることのできる在り方であり、動物も同様の在り方をしている、と述べた[5]。

(2) 振舞いととらわれ

本項では (1) で明らかになった動物の在り方について、実際の動物の行動から考察する。ハイデガーは逃げるミミズとそれを追いかけるモグラという例を挙げ、この逃げるや追いかけるがただの移動とは異なる独自の行動であると指摘した。そして動物特有の行動を振舞い、比較対象としての人間の行動を態度と呼称し、その違いを分析する。

> 動物たちの（中略）・・・への有能有は、振舞うことに有能なのである。有能有は衝動的であり、有能有とは、有能性が何に有能であるかのその何、つまり或る可能的な振舞い、の中へと向けて自分を前へと衝き動かす（Sichvortreiben）ことであり、またそのように前へと衝き動かされるがままになっていること（中略）である。動物の振舞いは、人間の態度とりのようなする（Tun）と行為する（Handeln）ではなくて、やらかす（Treiben）である（(ハイデガー 1998, p. 377)。

この記述はおおむね（1）で述べた衝動と有能性に関する説明と同様である。・・・への有能有、つまり何かが出来る存在は、その出来る「何か」に対して出来る振舞いの中に、自分を衝き動かし、また衝き動かされるままである。この衝動的な行動は動物の特徴であり、これをハイデガーはやらかしと呼称している。

ここでハイデガーは、有能性は自分固有主催性、自分を自分の下に留める性格を持つことに触れ、振舞うことができる、という動物の行動特徴にもこの性格が備わっていると述べる。

> ――動物が何に有能であるかのその何としての――振舞いにおいて、（中略）動物は自分を自分から衝き離すのではなく、そうではなくてまさに、自分を留め保ち、自分をとり込む、という仕方で動物は有るのである。（中略）振舞いはまさに留め―保ちととり―込みとであり、（中略）動物の自分の中へのとり込まれ（Eingenommenheit）を基礎としてのみ可能なのである。（中略）この自分の中へのとり込まれ、これをわれわれはとらわれ（Benommenheit）という語で特徴づけることにする（ハイデガー 1998, p. 379）。

動物は衝動の下で衝き動かされて振舞いながらも、自分を自分として留め保つように、自分をとり込む、つまり自分を自分自身の中へと衝き動かす。振舞いはこの留め保ちととり込みによって制限されているとも言え、ハイデガーはこの制限をとらわれと呼称する。このとらわれは動物が一時的、持続的になっているような、つまり動物に付属する何らかの状態なのではなく、「動物有そのものの内的可能性」（ハイデガー 1998, p. 380）である。

---

[5] ハイデガー 1998, pp. 372-5.

(3)　蜜蜂の実験からの考察

（2）で明らかになった動物の自分自身の中への衝き動かし、とらわれについて、ハイデガーは当時多く行われていた蜜蜂の実験を具体例として考察する。

1 匹の蜜蜂は 1 種類の花だけを選んで蜜を集める。蜜蜂は匂いでもって花を識別し、そこにめがけて飛んでいく。この 1 種類の花に対して飛行することは、蜜蜂の振舞いの 1 つである。なぜ花を探して飛ぶのか。それは餌を探す、という衝き動かされによるものである（ハイデガー 1998, p. 383）。

次にハイデガーは蜜蜂の蜜を吸ったあとそれを止めて飛び去る、という行動について「なぜ飛び去るのか？」（同）と問いを立てる。この問いについては大量の蜜が入った餌皿を用いた実験を参照する。餌皿の前に蜜蜂を置くと、蜜蜂は蜜を吸い、蜜がまだ残った状態で餌皿から飛び去る。また蜜を吸っている蜜蜂の腹部を切断すると、蜜蜂は腹部から蜜を流しながら蜜を吸い続ける。この結果から、蜜蜂は蜜を事物的存在として認識していて、蜜がなくなったと確認して飛び去った、という考えが否定される。これについてハイデガーは、動物は餌という衝動に衝き動かされ、とりさらわれており、このとりさらわれが蜜蜂の蜜を事物的存在として認識し確認する可能性を排除している、と分析した（ハイデガー 1998, p. 384）。

また腹部が切断された蜜蜂が蜜を飲み続ける実験結果から、通常の蜜蜂は蜜を吸うというやらかしを飽満によって抑止されていることが明らかになった。腹部を切断された蜜蜂は飽満になることがなく、ゆえに蜜を吸うというやらかしを続ける（ハイデガー 1998, p. 385）。この衝動と抑止解除の関係についてハイデガーは、「やらかしは単純に止まるのではなく、有能にされている有の衝き動かされが或る他の衝動へとハンドル切り替えされる」（同）と述べている。ここまでの結果からわかることは、蜜蜂は餌を探すという衝動に衝き動かされ、匂いによって蜜にとらわれている。このとらわれの下で蜜蜂は蜜を吸うというやらかしを行うが、飽満によって抑止される、と同時に帰巣衝動による飛び去りの抑止が解除される。これによりやらかしが、蜜を吸うから蜜を持って巣箱に帰るに切り替わる。動物は常に複数ある衝動の下で行動しており、抑止と抑止解除によって最も行動に影響を与える衝動を切り替えている。

続いて巣箱に関する実験から分析する。巣箱を後ろにずらすと、蜜蜂は迷って巣箱が見つけられなくなる。また巣箱から出て餌場にいる蜜蜂を別の箱に入れ、しばらくして巣箱の近くに放すと、餌場から巣箱に戻るための方向に一定距離飛んでいく。この結果から蜜蜂は巣と餌場の位置関係を、それぞれを認識して把握しているのではなく、太陽と飛行継続時間によって把握していることが明らかになる。そして巣や餌場を巣や餌場として認識していないがゆえに、場所や時間が変わっていても認識できず、太陽の向きや飛行距離によって把握した「本来あるべき位置関係」に基づいて飛行してしまうのである。この実験を踏まえてハイデガーは動物のとらわれについて以下のように考察する。

> 動物のとらわれ（Benommenheit）は、一方では、動物が他のものへと自分を関連させる場合に、（中略）或る有るものとして、態度をとってそれへと自分を関連させる可能性が、（中略）自分を関連させる相手のものを或るものとして会得して受けとる可能性が動物からはとりあげられている、まさにそのゆえに、動物は（中略）他のものによってとりさらわれ（hingenommen）て有ることができるのである（ハイデガー 1998, p. 392）。

この箇所を先ほどの蜜蜂の例を用いて読み解く。蜜蜂は花の蜜を蜜として個別に認識したり記憶したりする可能性が本質的に取り上げられている。しかしそれは蜜蜂が蜜と関わりがないということではない。蜜蜂は匂いによって花や蜜と関連を持つが、依然として花や蜜は動物に認識されてはいない。この動物の複雑な開性についてハイデガーは、「動物は原則的に（中略）自分を関わり込ませる（sich einlassen）という可能性を持っていない」（ハイデガー 1998, p. 393）と述べる。しかし匂いによって蜜と関連が生じているように、動物は振舞いにおいて開顕的ではない何かと関連している。この開顕的でない何かとは何なのか。この問いを明らかにするため、ハイデガーは「とらわれの根本性格」（ハイデガー 1998, p. 394）の考察を行う。

(4)　抑止解除の輪

「とらわれの根本性格」（同）の考察にあたり、ハイデガーは蜜蜂の実験で明らかにしたことを踏まえて、動物の衝動と振舞いの関連について記述する。

> 動物を輪で囲んでいる諸衝動の或る、順次の衝き動かされ、であり、しかもこの囲みの輪こそが振舞いを可能にするのであり、この振舞いの中で動物は他のものへと関連させられているのである（ハイデガー 1998, p. 401）。

これについて具体化すると、蜜蜂は餌を入手するという衝動によって衝き動かされて蜜を吸い、飽満によって抑止され、次は帰巣衝動に衝き動かされて花から飛び去る。この衝き動かされの中で動物は振舞い、花や太陽と関連させられている。

この振舞いの開性について、ハイデガーは以下のように述べる。

> 振舞いは、もろもろの動機づけに対しては、もろもろの動機に対しては、つまり、・・・への有能有をそのつどかくかくしかじかに起動させるものに対しては、つまり抑止解除するようなものに対しては、開けているのである（同）。

抑止解除するようなものとして挙げられている「諸衝動（中略）、諸々の切っ掛け、何かが出来る態勢にあるものをそのつど様々に起動させるもの」（串田 2017, p. 119）は、つまり動物がその時取りさらわれている衝動を切り替えるものである。振舞いは抑止解除するよう

なものに開かれている。これを言い換えると、動物は抑止解除するようなもののみに対して開かれており、抑止解除を「「襲う」（angeht）ようなもの、起動–させる、ようなもの」（ハイデガー 1998, p. 402）でないもの、つまり抑止解除のトリガーとならないものに対しては開かれていないと言える。動物を囲み、振舞いを可能にしているのはこの抑止解除の輪なのである。

ここまでで明らかにしたとらわれの構造は以下の 6 項目である。

> （1）とりあげられ、（2）とりさらわれ、（3）とり込まれ、（4）他のものに対する開け、（5）これと共に与えられている囲みの輪という構造、（6）とらわれ、があらゆる種類の振舞いの可能性の条件である、ということの指摘（ハイデガー 1998, p. 410）。

ハイデガーは「とらわれが有機体の根本本質」（ハイデガー 1998, p. 408）だと結論付け、動物の本性への探究に区切りをつける。そしてこの動物本性の探究の目的である、動物の世界貧乏性の解明に議論を戻していく。

2-2　世界貧乏的とはどういうことか

本節では 2-1 までで明らかになったことを踏まえ、最初の問いである世界貧乏的とはどういうことなのかを検討する。

ハイデガーは、動物本性への考察前の議論、すなわち本論文における 1 章までの内容について整理し、そこで残されていた問題について振り返る。世界を接近通路可能なあるものとして定義すると、動物は接近通路を持つがゆえに、人間と同じく世界を持つと言えることになる。一方「動物は世界貧乏的である」というテーゼを正しいとすると、貧乏性とは欠如、すなわち持たないことであり、動物は石同様に世界を持たないことになる。つまり動物は世界を持ち、また世界を持たないと言えることになっている（ハイデガー 1998, p. 422）。

ハイデガーはこの問題は世界定義の不十分によるものである可能性を指摘し、再定義を検討する。まず現在の定義の不十分さとは、接近通路可能性によって出会う存在者について、「存在者として」認識することができるのは人間のみである、という点が明確でない点である。動物の接近通路可能性は抑止解除の輪の中においてであるが、現在の定義では動物も人間と同様の接近様式を持っているという誤解が生じる余地が残っている（ハイデガー 1998, p. 423）。これを踏まえてハイデガーは「世界とは、ほかにもいろいろあるが特に、有るものとしての有るものの接近通路可能性をいうのである」（同）と世界を再定義した。

以上の再定義を踏まえて、改めて世界と動物の関係を考察する。

> 動物はそのとらわれにおいて抑止解除の輪の中で出会ってくるすべてのものへの関連をもっているまさにそのゆえに、動物は人間の側には立たないのであり、まさにそのゆえに、動物はいかなる世界をももたないのである（同）。

これは言い換えると、動物は抑止解除の輪の中で出会う存在者以外とは関連を持たないということであり、接近通路可能性について特殊な要件が発生している。また 1-2 で明らかにしているように、動物は存在者を「存在者として」見ることができる「として構造」を持っていない。以上より、動物が世界の定義を満たせないことが明らかになり、つまりそれは、動物は世界を持たないと言える。

> 動物がこのように世界をもたないということは、動物を石の側へと押しやるものでもない――しかも原則的に。（中略）抑止解除するものによるとりさらわれの衝動的有能有は、（中略）やはり一つの・・・に対する開け有ではあるのだから。これに反して石はこの可能性をももっていない（同）。

動物は世界を持たないということが明らかになったが、しかしそれは石と同様に無世界的であるということではない。動物は抑止解除の輪の中という制限はあるが、確かに何かに対する開性をもっている。一方石はこのような開性を一切持っていない。

一連の議論から得られた結論についてハイデガーは「動物においては抑止解除するものの開性をもつことにおいて世界をもたないということが存するのである」（ハイデガー 1998, p. 424）と端的に言い表した。

最後に、動物は世界をもたない、ということを何故貧乏的と表現するのかについて記述する。動物は世界をもたないが、この「もたない」が欠如を意味するには、前提として動物が世界を知っている必要がある。世界形成的である人間でさえ「世界そのものに関して本来何も知らない」（ハイデガー 1998, p. 425）のだから動物はなおさら知ることはない。ハイデガーは、動物は世界を本質的にもたないが、この「もたない」は「或る種のもつことを基礎にし」（ハイデガー 1998, p. 424）たもの、つまり人間の「世界をもつ」と比較した「もたない」という意味も含むと述べる。

> 世界貧乏性とは人間との比較における一性格である。人間の側から見ると動物は世界に関して貧乏的であるというだけのことであって、動物有がそれ自身において世界欠如であるわけではない。（中略）世界貧乏性のテーゼは動物性についての本質に固有の解釈ではなく、一種の比較解説にすぎない（ハイデガー 1998, p. 425）。

以上の内容から、「動物は世界貧乏的である」というテーゼの持つ意味が解明された。

3. デリダのハイデガー批判

本章では、前章までで明らかにしたハイデガーの動物論に対するデリダの批判を、『動物を追う、ゆえに私は（動物）である』をもとに検討する。その中でもハイデガーの動物論に

関する言及が多く含まれているⅣ章を中心に扱うが、この章は最終日に原稿なしの即興で行われたものである[6]。そのような経緯もあってか、Ⅳ章においてハイデガーの動物論に対する直接的な批判は控えめであり、『形而上学の根本諸概念』に疑問を述べつつ概説、といった記述になっている。宮﨑はⅣ章について「ハイデガーとの関連で「動物への問い」が十全に展開されているかといえば疑問なしとはしない。（中略）十分に練り上げられたものとは言えない」（宮﨑 2020, p. 195）としつつも、「デリダの「動物への問い」がハイデガーとの緊張関係のなかでこそ練り上げられているという事情が見えてくる」（同）と述べている。

そのため本章では、Ⅳ章からデリダがハイデガーの動物論の中でも特に「として構造」を問題視していることを確認し（3-1）、その補強としてⅢ章にあるラカンに対する批判部分を用いる、という宮﨑の記述を通してデリダのハイデガー批判を再構成する。そして最終的に本論の主題である貧しさテーゼ、「動物は世界貧乏的である」というテーゼに正当性はあるのか、という問いに結論を出す（3-2）。

3-1　デリダの「として構造」批判

本節ではデリダがハイデガーの「として構造」をどのように問題視していたのかを明らかにする。

デリダは『形而上学の根本諸概念』内の貧しさに関する記述である「貧乏有とは、（中略）あたかも持たないかの如くでありながら実は持っているというような卓越した意味での所持」（ハイデガー 1998, p. 317）という一節に注目し、「もっとも難解な場所の一つ」（デリダ 2014, p. 290）として以下のように述べている。

> この貧しさは位階秩序に捕らわれてはいないと、それは単に「より少ない」ことではないということを彼が強調しようとするときです――これは支持するのが非常に難しいことです。貧しいとは豊かさがより少ないことなのに、なぜ「貧しい」と言うのでしょうか？（中略）この貧しさは〈より少ない〉を意味するのではなく、ある意味では〈より多い〉を意味しさえする（デリダ 2014, pp. 290-1）。

デリダはこの貧乏有についてハイデガーの主張、すなわち動物は独自の開顕性を持つ、という点を踏まえて動物と世界の関係を読み解いていく。

その中で、「として構造」の記述に至ったデリダは、「として構造」について自身の脱構築[7]の試みに触れて以下のように述べている。

> ハイデッガーが「それとして」について述べることに意を唱えるのではなく、（中略）

---

[6] デリダ 2014, pp. 6-7.

[7] 脱構築とは「「現在」や「現前」の特権を、西洋哲学の伝統全体において問い質す」（宮﨑 2020, p. 23）ことであり、デリダの思想における代表的な概念である。

> ハイデッガーまで含めた哲学というものの全体において絶対的な構造化要因であるあの対立、あたかも「それとして」（als Struktur）とその反対のあいだにしか選択肢はないかのようなあの対立から、最終的には出ていかなくてはならないということを強調することになるでしょう（デリダ 2014, p. 292）。

この箇所から、デリダは「として構造」の持つ、暗に「それとして」と「それとしてではなく」という対立する二つしか存在しないかのような前提を問題視していることが明らかになった。

3-2　ラカンの動物論と「として構造」の問題点

前節 3-1 で明らかになったデリダの「として構造」の批判について宮崎は、『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』のハイデガーを中心とした講義部分であるⅣ章だけではわかりづらいが、その前章であるⅢ章のラカンへの言及に目を向けることで明確になると述べている。本節ではこの宮崎の記述をもとにデリダの「として構造」批判を考察する。ラカンの動物論については本論の大筋から逸れるため、その多くをデリダ、宮崎の記述に依る。

(1)　ラカンの動物論とデリダの批判

宮崎はラカンの動物論についてデリダの論点に沿って記述している。

> そもそも動物が行うあらゆるふるまいには、マークないし痕跡の構造がそなわっている。（中略）いかなる動物の行動も、それを受け取るのが人間であれ他の動物であれ、他者の感覚器官に対してなにがしかの効果を跡づける（ここで想定されている「痕跡」は最広義のそれである）（宮崎 2020, p. 212）。

ここで言われている動物の痕跡とは、歩いたときにつく足跡や糞尿、木の幹につく爪の跡、抜けた毛など、動物のあらゆる行動に伴って残されるものを指す。そしてその痕跡を認識した生物になんらかの効果を与える。例えば足跡であれば、天敵のものを見たら警戒する、逃げる、餌となる生物のものを見たら追う、狩場として記憶する、といった形であらわれる。

そしてラカンはこの痕跡を消したり操作したりできるのは人間のみであり動物にはできないと主張する。

> さまざまな動物が生死を賭けて抗争や性的誇示を行うのに擬態を駆使するとしても、それは単純な偽装にとどまるのであって、偽装の偽装を行うわけではない。（中略）動物の偽装はいわば第一段階のレヴェルにとどまるのであり、偽装を「偽装として」操作する高階の偽装に関与することはできない。後者は（中略）階層化の操作を必要としており、これこそ人間固有の能力である、というのがラカンの主張する基本的な論点であ

る（宮﨑 2020, p. 212）。

動物が生命活動の中で行う偽装とは、例えば自身の姿を風景に溶け込めるようにする性質や、自身の天敵が近寄りにくいような姿形に成長、進化することなどが挙げられる。そしてこれらの偽装はあくまで単純な偽装であり、偽装を偽装「として」行う、つまり「足跡を付けたり消したり、あるいは別のものに置き換えたりといったこと」（同）を「敵の追跡を攪乱するために」（同）と認識して行うことはより高次な行動であり、動物にはできないとラカンは主張している。ここで言われている階層化の操作とは、ただ行っている偽装を、偽装したい相手と痕跡の操作を行うことで発揮される効果を想定した行動にする、つまり「欺きたい他者に認識される足跡」として操作するということだと考えられる。

このようなラカンの論に対し、デリダは以下のように指摘している。

> 第一に困難に思われることは、偽装と偽装の偽装のあいだに、一つの限界を、すなわち分割不可能な閾を、同定ないし規定することである。それに、（中略）偽装を偽装することは動物一般に不可能であると、いかなる知の名において、あるいはいかなる証言（中略）の名において平然と明言できるのか、それは知るべく残ることだろう（デリダ 2014, p. 244）。

まず偽装と偽装の偽装の間の境界について、デリダいわく、ラカンは知や証言を提示しておらず、「純然たる独断」（デリダ 2014, p. 245）である。そしてそのような独断が生じた理由について、偽装と偽装の偽装の間に境界線を引くことの困難さ、あるいは不可能さを漠然と認識していたからではないかと述べている（同）。

次に偽装の偽装を動物は行えないとしている点について、これは言い換えると「動物は自身の痕跡を消すことができないのか」という疑問である。そしてこの指摘内容についてもラカンは「証言によっても、動物行動学的な知によっても正当化していない」（デリダ 2014, p. 247）。加えてデリダは、あらゆる偽装とは「単純な偽装でさえも、ある感性的痕跡を、読み取れないように、あるいは知覚できないようにすること」（デリダ 2014, p. 248）であり、それは動物の行う偽装も同様であると述べ、より高次の偽装、すなわち偽装の偽装において可能とされている抹消が一切含まれていないとは断言できない、と指摘している（同）。

ここからデリダは痕跡の構造に注目し、以下のように論を展開する。

> 問題は動物にあれこれの力能（中略）を拒絶する権利があるかどうかを問うことばかりではない。人間とおのれを呼ぶものが、まったき厳密さにおいて、それが動物に拒絶するものを人間に帰する権利を、ゆえにおのれに帰する権利を持っているのかどうか、そしてこのものがそれらのものについて、純粋、厳密かつ分割不可能な概念を、それとして、果たして持っているのかどうかを問うことでもある（デリダ 2014, p. 248）。

この問いをこれまでの議論に沿った例を用いて言い換えると、仮に動物が痕跡の抹消を行えないとして、どのような権利でもって人間には可能だと言えるのか、ということである（同）。デリダは痕跡を抹消した痕跡が残る可能性や様々な要因から抹消した痕跡が回帰する可能性を指摘したうえで、痕跡を抹消することが不可能であるという考えを否定する（デリダ 2014, p. 249）。ここで問題としているのは痕跡の抹消の可能・不可能ではなく、痕跡の抹消の実効性を何をもって判断するのか、という点である。

> 痕跡は（おのれを）抹消する、それは万物と同様であるが、それを抹消することが、とりわけその抹消を「判断する」ことが、（中略）本性上保証された力能によってそうすることが、誰の力能にも属さないということが痕跡の構造の本領なのである（デリダ 2014, pp. 249-50）。

「誰の力能にも属さないということが痕跡の構造の本領」（同）ということから、人間にのみ痕跡の操作ができ、動物にはできないとするラカンの動物論は否定され、痕跡操作の可能不可能を基準に人間と動物を区別することはできないことが明らかになった。

(2)　「として構造」批判への接続と貧しさテーゼの正当性の検討

（1）で考察したデリダのラカン批判について、宮崎は以下のようにまとめている。

> デリダの主張の要点とは、いかなる言語的ないし記号的なふるまいにも痕跡の構造がそなわっているかぎり、人間はみずからの有意的なふるまいを、主人的ないし主意的に操作したり偽装を「偽装として」制御したりしうる最終的な権限をもちえないということである。（中略）その権能の有無は、動物と人間を分かつ分割線にはなりえないのだ（宮崎 2020, p. 214）。

このラカン批判がどのように「として構造」批判、ハイデガー批判の補強となるのか。

1-2 で行った各テーゼの差異の検討から、ハイデガーが「として構造」の有無を人間と動物の違いであるとしていることを確認した。宮崎は「として構造」について以下のように批判している。

> 一般に「として構造」は、一方における存在者 A と、他方における「存在者 A」として枠づけられた存在者 A' との差異（中略）を欠いては成立しない。ハイデガーの「として構造」に含意されるこうした階層化こそ、デリダが一貫して問題視する伝統的な区別に棹さすものなのである（宮崎 2020, p. 211）。

階層化はラカン批判内でも出てきた概念であり、宮崎によれば、「として構造」とラカンの唱える偽装は階層化という点で一致している。偽装において階層化は、ただの足跡と騙したい相手を意識した、操作する対象としての足跡の違いという形で示されていた。「として構造」における階層化は「トカゲにとって太陽は太陽として接近通路可能であるかどうか、トカゲにとって岩板は岩板として経験可能であるかどうか」（ハイデガー 1998, p. 320）という点に現れている。トカゲにとって岩板や太陽は生息に適した諸条件を持つ外的環境であるが、人間にとって太陽は太陽、岩板は岩板であり、外的環境からさらに細分化された認識を持っている。単純な外的環境という認識と、個々に別物と認識するこの差は、偽装の場合と同様の階層化の現れである。偽装、「として構造」に共通する階層化とは、認識には階層があり、単純な認識からより高度・複雑な認識へと移行することだと考えられる。

そして宮崎はこの階層化について、「「として構造」が前提としている（中略）階層化は、それが依存している痕跡の構造によってその内部から掻き消され、侵食されてしまう」（宮崎 2020, p. 214）と指摘している。階層化が痕跡の構造に依存しているとはどういうことか。宮崎はこの記述についてより詳細な記述は行っていないが、「として構造」の具体例から、階層化が行われる対象に痕跡構造がそなわっている、ということだと考えられる。

これまでの議論を整理すると、まず動物のあらゆる行動には痕跡構造がそなわっている。そして痕跡は誰の下にも属さないという構造を本質的に持っている。「として構造」において、階層化の対象となっているのは、岩板や太陽といった、動物にも人間にも同様に与えられているものに対する認識である。この認識は対象と何かしらの関係を持つ、接することで生じるものである。動物は岩板や太陽を見たり温度を感じたり、といった何らかの方法で知覚する。動物のあらゆる行動には痕跡がそなわっていることから、対象を知覚するという行動によって痕跡が残ると言える。ゆえに知覚の結果形成される認識には痕跡構造が組み込まれており、その認識を対象に階層化が行われることを「痕跡構造への依存」と表現していると考えられる。

再度宮崎の指摘へ立ち返る。階層化が痕跡に依存していることで、階層化は「内部から掻き消され、侵食され」（同）る。この箇所を検討するにあたってデリダのラカン批判を再度引用する。

> 人間とおのれを呼ぶものが、まったき厳密さにおいて、それが動物に拒絶するものを人間に帰する権利を、ゆえにおのれに帰する権利を持っているのかどうか、そしてこのものがそれらのものについて、純粋、厳密かつ分割不可能な概念を、それとして、果たして持っているのかどうか（後略）（デリダ 2014, p. 248）。

宮崎は「として構造」で行われる階層化、「人間は太陽を太陽として認識できるが、動物はそうではない」という差異に対しても上記の引用と同様の批判が言えるのではないかと主張しているのである。つまり「人間はできて動物はできないとされている太陽を太陽として

認識出来る力能は、本当に人間に認められているのか」、という指摘である。この指摘により階層化を伴う「として構造」は「暫定的な想定」（宮﨑 2020, p. 214）になってしまう。その結果、「として構造」は「ハイデガーが望むような意味で、けっして動物から人間を本性上区別する特権を保証するものにはなりえない」（同）ことが明らかになる。

ここまでの議論を踏まえて本論文の主題である「動物は世界貧乏的である」というテーゼの正当性を検討する。上記のテーゼは、「として構造」は人間にのみ与えられたものである、という前提のもと、人間と動物を区別し、それぞれ定義づけたものである。しかし先の議論で、人間のみが「として構造」を持っているという前提が自明のものではないことが明らかになった。それにより、上記のテーゼにおいて人間と動物が区別されていることの根拠の正当性が失われたのである。以上より、「として構造」の有無を根拠とした動物と人間の区別は不適当であり、その区別を前提として成立している「動物は世界貧乏的である」というテーゼに正当性はないと考える。

おわりに

本論文では、『形而上学の根本諸概念』におけるハイデガーの「動物は世界貧乏的である」というテーゼに正当性はあるか、という問いに対し、デリダによる「として構造」の批判を用いて、「として構造」の有無を根拠にした動物と人間の区別は適切でないことを指摘し、その区別が前提にある上記のテーゼに正当性がないことを主張した。

第 1 章では『形而上学の根本諸概念』第四五〜五十節の内容を参照し、動物の貧しさテーゼについて、3 つのテーゼを比較することで考察した。それにより無世界的な石と何らかの接近通路可能性を持つ動物、特有の接近様式である「として構造」を持つ人間とそれを持たない動物という差異が明らかになった。また異なる接近様式に対して「同行」することで理解しようとする「移し置き」について、人間－動物間のものに焦点を当てて検討した。それにより、動物は人間の持っている何かを欠如しており、その欠如をもって世界貧乏的と表現していることが明らかになった。

第 2 章では『形而上学の根本諸概念』第五一〜六三節の内容を参照し、動物本性の考察による貧しさテーゼの解明を試みた。動物本性の考察から、動物は衝動の下で衝き動かされて振舞うが、それは衝動を切り替えるものの囲み、抑止解除の輪の内側でのみ可能であることが明らかになった。この動物の独自の開性から、世界を持つ人間との比較において「動物は貧乏的である」と言えることがわかった。

第 3 章では前章で明らかにしたハイデガーの動物論に対する批判として、デリダの『動物を追う、ゆえに私は（動物）である』を参照し、「として構造」とラカンの動物論における偽装、そして痕跡構造の考察を行った。ここから「として構造」と偽装は階層化という点で共通していること、そして階層化は痕跡構造によって想定の域を出ない概念になり、階層化を内包した「として構造」もまた自明的な正当性を持たないということが明らかになった。以上より、「として構造」の有無は人間と動物を区別する根拠になりえず、「として構造」の

有無による人間と動物の区別が前提にあるハイデガーの動物のテーゼには正当性がないと結論づけた。

本論ではハイデガーの動物論について、ハイデガー自身の記述に加えてデリダの批判から検討するものである。3 章にあたるデリダの批判からの検討部分は、ハイデガーへの直接的批判よりもラカンへの言及部分を多く参照している。これは宮﨑の試みに沿って論を展開したゆえであるが、この試みの正当性について批判的な視点が欠けていることは否定できず、検討の必要がある。またラカンの動物論について、本論ではデリダと宮﨑による批判から構成し、記述している。ラカンの論の中でも特に痕跡は、本論の結論を導くにあたって重要な構造であり、原典の記述から考察する必要がある。以上の 2 点を今後の課題とする。

参考文献

デリダ, J.『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』（鵜飼哲訳）、筑摩書房、2014 年
ハイデガー, M.『形而上学の根本諸概念 世界―有限性―孤独』（川原栄峰・セヴェリン＝ミュラー訳）、創文社、1998 年
ハイデガー, M.『存在と時間 II』（原佑・渡邊二郎訳）、中央公論社、2003 年
串田純一『ハイデガーと生き物の問題』、法政大学出版局、2017 年
宮﨑裕助『ジャック・デリダ――死後の生を与える』、岩波書店、2020 年